

主日礼拝説教「捨てて得るもの」

日本基督教団石神井教会 2017年3月19日

【旧約聖書日課】ヨブ記 1章6～12節

⁶ある日、主の前に神の使いたちが集まり、サタンも来た。⁷主はサタンに言われた。「お前はどこから来た。」

「地上を巡回しておりました。ほうほうを歩きまわっていました」とサタンは答えた。

⁸主はサタンに言われた。「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。」

⁹サタンは答えた。「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか。¹⁰あなたは彼とその一族、全財産を守っておられるではありませんか。彼の手の業をすべて祝福なさいます。お陰で、彼の家畜はその地に溢れるほどです。¹¹ひとつこの辺で、御手を伸ばして彼の財産に触れてごらんください。面と向かってあなたを呪うにちがいません。」

¹²主はサタンに言われた。「それでは、彼のものを一切、お前のいいようにしてみるがよい。ただし彼には、手を出さぬ。」

サタンは主のもとから出て行った。

【使徒書日課】ペトロの手紙一 4章12～19節

¹²愛する人たち、あなたがたを試みるために身にふりかかる火のような試練を、何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。¹³むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ちあふれるためです。¹⁴あなたがたはキリストの名のために非難されるなら、幸いです。栄光の霊、すなわち神の霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです。¹⁵あなたがたのうちだれも、人殺し、泥棒、悪者、あるいは、他人に干渉する者として、苦しみを受けることがないようにしなさい。¹⁶しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、決して恥じてはなりません。むしろ、キリスト者の名で呼ばれることで、神をあがめなさい。¹⁷今こそ、神の家から裁きが始まる時です。わたしたちがまず裁きを受けるのだとすれば、神の福音に従わない者たちの行く末は、いったい、どんなものになるだろうか。¹⁸「正しい人がやっとなら救われるのなら、不信心な人や罪深い人はどうなるのか」と言われているとおりです。¹⁹だから、神の御心によって苦しみを受ける人は、善い行いをし続けて、真実であられる創造主に自分の魂をゆだねなさい。

【福音書日課】マタイによる福音書 16章13～28節

¹³イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、弟子たちに、「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。¹⁴弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」¹⁵イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」¹⁶シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。¹⁷すると、イエスはお答えになった。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いです。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。¹⁸わたしも言っておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。¹⁹わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつなげられる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」²⁰それから、イエスは、御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた。

²¹このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。²²すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いきめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」²³イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」²⁴それから、弟子たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。²⁵自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。²⁶人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。²⁷人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。²⁸はつきり言っておく。ここに一緒にいる人々の中には、人の子がその国と共に来るのを見るまでは、決して死なない者がいる。」

「あなたはペトロ」

今、ご一緒に歌いました『讃美歌第二編』111番「岩なる主イエスを」を、水曜日の「聖書と祈りの会」で歌いましたら、皆さんあまりご存じでいらっしゃいませませんでした。古いラテン語の聖歌が元になっていますが、「教会」を主題とした歌詞で、楽譜の下には今日の福音書の聖句の一節も参照箇所として記されています。この讃美歌は、「岩なる主イエスをいしずえとして」と歌い始めます。教会は主イエスという岩を礎にしている、というのです。詩編には、「神こそがわたしの岩だ」という表現が繰り返し出てきます。主イエスが教会の礎となる岩だという表現は、詩編が「神こそがわたしの岩」と言い表すところから用いられるようになったのでしょう。

ところで、この讃美歌の参照箇所の一つだと言いました今日の福音書では、主イエスは、「**あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる**」とおっしゃられているのです。「あなた」とは、弟子のシモンのことです。シモンが主イエスのことを「**あなたはメシア、生ける神の子です**」と告白したことに対して、主イエスは、そのシモンのことを「ペトロ」とお呼びになった。「ペトロ」というのは、ギリシア語で「岩」という意味です。使徒パウロがこのペトロのことを「ケファ」と呼んでいるところがありますが、「ケファ」というのは、アラム語でやはり「岩」という意味の語です。どちらにしても、主イエスは、弟子のシモンのことを指して、このとき、「あなたが岩」と呼ばれた。そして、「この岩の上にわたしの教会を建てる」とおっしゃられた。それが、今日の福音書の前半で伝えられていることです。

そうであれば、わたしたちは、先ほどの讃美歌を、「岩なる主イエスをいしずえとして」ではなくて、「岩なるペトロをいしずえとして」と歌うべきなのではないでしょうか。皆さんは、どうお考えになられるでしょうか。

こう考える方があるかもしれません。確かにペトロはこのとき、「あなたはメシア、生ける神の子」と告白をして、いわば信仰のテストに合格したので、主イエスは、合格のしるしとして「あなたはペトロ。あなたの上に教会を建てる」とおっしゃってくださったのだけれども、ペトロは直後に、主イエスがご自身の死と復活について予告された言葉の意味が分からずに余計なことを言ってしまう、主イエスから今度は「**サタン、引き下がれ**」と叱責されてしまった。つまり、一度は合格した信仰のテストに、次のテストで失格してしまったから、あの「ペトロの上に教会を」という約束も駄目になってしまったのだ、と。

「サタン、引き下がれ」

確かにペトロは、この後、繰り返し、主イエスを落胆させるようなことをしました。一番に思い出されるのは、主イエスが当局の兵士たちに逮捕されていったときに、ペトロが三度も「わたしはあの人を知らない」と主イエスのことを否んだ逸話かもしれません。ひどいことには、ペトロは、直前まで「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」(26:33)と言ってい

たのです。そして、三度主イエスのことを「知らない」と言ってしまった挙句に、男泣きに泣いたというペトロの姿を見て、わたしたちは、内心ホッとするわけです。「ああ、自分もペトロと同じだ」と。「自分もペトロと同じだから、やはり、教会の礎となる岩は、ペトロでも自分たちでもなくて、主イエスで良いんだ」と。

しかし、本当にそうなのでしょうか。それでよいのでしょうか。主イエスが「あなたはペトロ。あなたの上に教会を建てる」とおっしゃられたことは、もう考える必要がないのでしょうか。あのとき、ペトロは、「あなたの上に教会を建てる」と言われて重圧に押しつぶされそうになっていたけれども、「**サタン、引き下がれ**」と主イエスに言われて、実は内心、プレッシャーから解放されてホッとした。そういう逸話なのでしょうか。

「**サタン、引き下がれ**」と叱責されたとき、ペトロは驚いたのに違いありません。そんなことを言われるとは思ってもみなかった。自分は主イエスのことを心配して、そっと助言したつもりだったのです。「**主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。**」

主イエスが、自分は人々の手に渡されて苦しみを受けて殺されることになる、と言われたことを、ペトロは心配したのです。そんなことがあってはいけないと思ったのです。それどころか、ペトロは、主イエスが神を冒瀆しているとさえ思ったのかもしれませんが。というのは、「**とんでもないことです**」というペトロの言葉は、直訳すれば「あなたに神の情けがあるように」という言葉なのです。「神の情けがなければ、あなたのしたことは決して赦されない」ということを言い表す慣用句なのです。神を信じているはずの者が「自分は苦しみを受けて殺される」などと言うのは、神の御守りを疑う冒瀆行為だと、ペトロには思われたのです。

信仰は、救いを願うことです。神を信じる信仰が確かなものになったら、苦しみから解放され、悩みも解決するし、死の恐れも取り払われるだろうと、わたしたちも期待します。ところが、信仰生活を続けてもなかなかそうならないと、わたしたちは、「自分の信仰が足りないから」などと言うのでしょうか。でも、そうなののでしょうか。本当は、わたしたちは誰であれ、信仰生活を続けていても、苦しいことはなくなるのではないのでしょうか。悩みがなくなるどころか、ますます悩ましいことが増してくるということがあるのではないのでしょうか。死の現実とは、相変わらず、すべての者に襲いかかってくるのではないのでしょうか。

できれば、そういうことから逃れたいのです。そういった「負」の現実を否定したいのです。そのようなものを完全に否定できる信仰心を得させてもらいたいと、神に願おうとしている。そういうところが、あるのではないのでしょうか。

ペトロは、そういうことを神に願うべきだと考えたのではないのでしょうか。苦しみから逃れさせてくださることを、人に殺されるような現実から離れさせてくださることを、そういうことを実現してくださる神に信頼を寄せるべきだと、考えたのではないのでしょうか。自分に苦しみがふりかかるとか、人に殺されるとか、そういう現実の中から逃れることを神に願わないのは、神に対して失礼だと考えたのではないのでしょうか。

けれども、主イエスは、そのようなペトロに対して、「サタン、引き下がれ」とおっしゃられたのです。「あなたのしていることは、サタンの誘惑だ。苦しみを受ける現実の中に進んでいこうとするわたしの道を邪魔することだ」と。

「わたしに従いなさい」

主イエスは、ペトロのことを「サタン」呼ばわりされました。けれども、ペトロが裏切って、神に敵対する「サタン」の陣営に寝返った、と言われているのではないのです。本当は、神に敵対するような「サタン」の実体など、どこにもないのです。そこにいるのは、「ペトロ」と呼ばれるようになった一人の弟子だけなのです。彼は、この地上で起こる苦しみの現実を否定しようとしている。彼は、その現実から離れていることを願っている。そこには、神の御心が働いていないと思っているからです。そこにあるのは、人間の思惑だけだと、そう考えているからです。しかし、そのように考えることこそ「サタン」の考えだと、主イエスはおっしゃられるのです。

「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」。

主イエスの行かれる道を邪魔してはいけないのです。そこが、たとえ苦しみと死に満ちた道だとしても、です。なぜか。そこも、神の御心に憶えられているところだからです。神の御心のご計画のうちに置かれている道だからです。この地上のどこであっても、神の御心から見捨てられたようなところは、どこにもないのです。人間の思惑が如何なるものであっても、その思惑よりも、神の御心、すべての者の命を救うという御心のほうが、はるかに確かなことなのです。

「だから、あなたはわたしに従いなさい」と、主イエスは、ペトロに、弟子たちに、わたしたちに、なお呼びかけてくださいるのです。「**自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい**」とお呼びかけくださっている。

現実には、なお、自分を捨てきれないわたしたちなのです。自分を捨てるかわりに、主イエスを捨て（**そんな人は知らない** 26:74）、神を捨てているのが、わたしたちの姿なのです。けれども、そんなわたしたちをも、神はお見捨てになられないのです。お見捨てになられるどころか、シモン・ペトロに対してなされたように、わたしたちを、「イエスは生けるキリスト、神の子です」と信仰を告白する者にしてくださいる。主イエスに従う者にしてくださいる。それが、天の父の御心だからです。

その御心によって、わたしたちは、シモンと共に「ペトロ」と呼ばれるのです。「あなたの上に教会を建てる」と告げていただいているのです。主イエスを捨ててきたわたしたちが、なお御心によって、主に従う者、主に結ばれた者とされて、「岩なる主イエス」と等しい者とお呼びいただいているのです。もう、わたしたちは、自分を捨てず、人間的な思惑に囚われている、というわけにはいかない。わたしたちの従うべき主が先行かれた道は、たとえ困難な苦しい道であったとしても、神の愛される人々の営む、神に招かれた人々の生きる世界にあるのです。